



日本プライマリ・ケア連合学会
中国ブロック支部



発行人:中国ブロック支部長 松下明
(岡山家庭医療センター 奈義ファミリークリニック)

2025 年度日本プライマリ・ケア連合学会中国ブロック支部で指導医講習会を開催しました。

2025 年 4 月 27 日に、第 13 回日本プライマリ・ケア連合学会中国ブロック支部学術集会にて、指導医講習会を開催することができました。そのため、ご報告させていただきます。



題目は、「専攻医を指導できる『場』をつくるには？ ～ループリックから臨床（教育）現場を考える～」としました。この講習会を企画する議論の中で、専攻医も指導医自身も現場で「専攻医が安心して学べる場」を構築するためには、「ループリックを日常にする」必要があるのではないかという話が出てきました。そのため、ループリック全体を眺め、各エントリー領域の実践状況を見直し、臨床（教育）現場での実装が不十分な領域に対して具体的な取り組みをデザインするワークショップ型の構成としました。

○メインワーク 1：ループリックの理解と現場への適用

○メインワーク 2：現場でのループリック実装計画作成

メインワーク 1 では、参加者個々の現場において、ループリックに掲げられた診療領域にどれだけ対応できているかを自己評価し、それをグループで共有・可視化するマッピングを行いました。これにより、専攻医に十分な経験を提供できていない領域や、潜在的な教育資源がある領域を浮き彫りにすることを目指しました。

メインワーク 2 では、メインワーク 2 で見えてきた課題を踏まえて、グループごとに「1 年以内に実現可能なループリック実装計画」を立案した。計画には、対象とするエントリー領域、達成目標、活用できるリソース、関与するステークホルダー、想定されるリスクと対応策などを含めるようなワークシートを準備しました。

ループリックを個人でじっくり眺める時間を設けたことにより、日頃漠然と感じていた教育課題の言語化が促され、参加者の内省が深まったように感じました。グループワーク中は、異なる組織背景を持つ参加者間での対話が活発に行われる様子が観察されました。

事後アンケートでは、参加者の大多数が「現場の仕事に関連していた」「役立つと感じた」「実際に活用できる」と回答していました。自由記述では、「ループリック実装のための具体的な計画が役立つ」「他職種を巻き込む教育を検討したい」「学生指導にも応用したい」といったコメントがありました。また、「現場でのオリエンテーションや関係づくりにも活用できる」「院内の業務改善にも応用可能」など、教育を超えた多様な実務への応用可能性についてのコメントもありました。



今回の指導医講習会では、「ループリック全体を眺める」ということが一つの特徴になったなあと感じています。

ループリックを専攻医・指導医の日常の臨床（教育）現場でどのように活かしていくか、を考える場づくりを今後も検討していきたいと思います。

【中国ブロック支部 専攻医オリエンテーション】

専攻医オリエンテーションを、以下の内容・日程で開催いたしました。

今年も現地開催を行い、自由闊達に意見の交わされる活気あふれるオリエンテーションとなりました。

○日時：2025 年 4 月 27 日（日） 9：00～12：00

○開催形式：現地開催

○対象者：

- ・日本プライマリ・ケア連合学会（JPCA） 新・家庭医療専門医研修を開始した専攻医
- ・日本専門医機構 総合診療専門研修を開始した専攻医
- ・上記プログラムの 2～4 年次専攻医
- ・専門医、指導医、その他の職種
- ・初期研修医、医学生

○内容：

- ・草場理事長ご挨拶_動画 ※オンライン配信あり
- ・専門医制度・Fami-log 説明_動画 ※オンライン配信あり
- ・レクチャー

池田晃太郎 先生（広島大学病院 総合内科・総合診療科）：「総合診療研修の Tips」

中井翼 先生（鳥取大学医学部地域医療学講座）：「新・家庭医療専門研修の Tips、および専門研修で役立つ学習ツール・書籍・セミナーについて」

- ・専攻医交流会（グループディスカッション）

テーマ：「対話で深める！総合診療医のアイデンティティ」

講師 本村和久 先生（まどかファミリークリニック）

はじめに、JPCA 草場理事長から動画で激励の言葉をもらい、その後に新・家庭医療専門研修制度や Fami-log の使用・活用方法の説明を受けました。続いて先輩若手医師らのレクチャーがあり、総合診療研修や新・家庭医療専門研修における Tips や研修をより充実したものにするためのコツといった、研修を経験したからこそ語れる実践的な内容のレクチャーが行われ、新専攻医を中心に大変好評でした。

後半は、「どうして総合診療の道を選んだのか」や「総合診療医として何が理想か」といった普段なかなか話さない総合診療医・家庭医のアイデンティティについて 4～5 人ずつの専攻医同士の小グループにわかれて語り合いました。活発な意見交換とともに、プログラムの垣根を越えた交流を深めることができたようです。実際に参加した専攻医からは、「専攻医資格を取得するまでの全体像が見え、大変勉強になりました」や「ディスカッションをすることで色々な方のお話が聞けてよかった」との感想がありました。

依田窪病院・内科 小原亘顕

【中国ブロック支部ポートフォリオ発表会開催報告】

2025 年 4 月 26 日（土）、鳥取大学医学部記念講堂にて、第 13 回日本プライマリ・ケア連合学会中国ブロック学術集会の一部として「ポートフォリオ発表会」を開催致しました。

本発表会は「ポートフォリオと対話で広がる視野、深まる学び」をテーマに行われました。専攻医 24 名、指導医 3 名の計 27 名が発表を行い、参加者は約 100 名にのぼりました。限られた時間の中でもより質の高い議論ができるよう、あらかじめ抄録集を作成して配布し、参加者が事前に内容を把握できるように工夫しました。開催形式は対面でのポスター発表とし、専攻医の発表後にまずその場でディスカッションを行いました。さらに、発表後にはポスター前での自由討論の時間も設け、専攻医とオーディエンスとの活発な対話を通じて、学びを深める機会となりました。また、限られた時間内で発表者がより多くのフィードバックを得られるように、コメントを記載するフィードバック用紙も併用しました。

各発表は、それぞれに工夫が凝らされており、臨床経験に根ざした学びや、自身の成長を真摯に振り返る姿勢が随所に見られました。発表内容そのものの充実ぶりもさることながら、発表者とオーディエンスとのディスカッションが非常に有意義で、現場での悩みや気づきを共有しながら議論を深めていく様子が印象的でした。実行委員として、これほどまでに参加者同士が真摯に耳を傾け、互いに学びあう場を創り出せたことを嬉しく思うと同時に、多くの学びを得る貴重な経験となりました。

ご参加いただいた皆さまに、心より感謝申し上げます。

鳥取市立病院総合診療科

櫻井重久



【活動報告】

【m-HANDS 2024 第 8 回の報告】

中国ブロックでの指導医養成の報告

出雲家庭医療学センター大曲診療所 藤原和成

岡山家庭医療センター奈義ファミリークリニック 松下明

【m-HANDS-FDF】

(modified - Home and Away Nine DayS - Faculty Development Fellowship)

9年の間継続してきた中国ブロックの指導医養成コースです。10年目となる今年度はオンライン開催に加え一部オンサイトを導入します。8月から3月まで、月に1回全8回のコースとして実施しています。

今年度も、JPCA-MLなどで募集して中国地方の指導医4名が参加中です。チームを作って様々な課題に取り組んでもらっています。

以下に第1回に参加してくれた指導医からの報告の一部を掲載します。

2025年度も引き続き開催を予定しています、ご興味のある方はぜひご連絡下さい。

〈目的〉

中国ブロックの指導医の養成とプログラム運営の質向上を通して、プライマリ・ケアの普及と発展をめざす

〈対象〉

- ・中国ブロックに所属しており、家庭医療後期研修を修了した医師
- ・中国ブロックの家庭医療後期研修に関わる指導医

〈アウトカム〉

Core Competence : Adult Educator (成人学習支援者)

学習者と向き合い、その学びに気を配り、学びの場をサポートできる

教育者の役割と限界を知り、学習者と協同的に学び、生涯学習者を育てる姿勢で関わる

学習者の学びを促進するための理論と技術を適切に用いることができる 参加者と講師による学習共同体の形成を勧め、ブロック内の指導医ネットワークを作る

机上のプログラム作成だけでなく、各現場での仕組みづくりや教育チーム形成ができる

総合診療の魅力やプログラムの魅力を効果的に伝えられる発信力や求心力を発揮できる

ツールの活用や工夫などで独創的で質の高い遠隔教育ができる

第8回 オンライン開催 2025年3月15日(土)

【教育贈与論】

これまでのm-HANDSで学んできた「アウトカム基盤型教育」とは異なり、即物的な学習効果を求めない「贈与」として教育を捉える考え方を学んだ。「教育が贈与として成り立つかどうかは、学習者の準備状態や教育者の情熱に左右される」「教育を教える側の『持ち出し』とみなすのはある種の賭け」「贈与をおこなう人は既に贈与の恩恵を受けている」といった意見がフェローからあがった。そもそもm-HANDSにかかわる人々がおおよそ贈与的であり、どちらか一方のスタンスのみでなく、バランスのとれた教育者でありたいと感じた。(戸川雄)

【卒業制作その後の発表】

前年度卒業生のうち、3名の卒業制作のその後についての発表があった。救急科の研修医対応、市中病院の学生実習、県内の地域医療に関連した繋がりという三者三様のテーマで卒業制作をされ、それぞれ実施、評価がなされていた。実施されなかったプロジェクトはなかったが、実施しても想定通りに進むとは限らないこと、ニーズ評価の段階で自分の期待を無意識に反映してしまう可能性があること、1人で取り組むのではなくチーム・仲間と一緒に取り組むことの重要性などさまざまな学びが得られた。自分も一年後に今回のその後を報告できるよう卒業制作のプロジェクト運営にしっかり取り組んでいきたい。(山本優里)

【PF 発表会】

各自が6つのエントリー領域から1つを選び、ショーケースポートフォリオの形式で事前に作成したポートフォリオ

を発表した。報告者を含め4人全員が「①学習者と向き合い、その学びに気を配り、学びの場をサポートできる」の領域で作成していた。それぞれ学生もしくは専攻医を相手とした教育の現場での困難さを感じた事例に対し、Difficult Teaching Encounterの枠組を意識した対応や、効果的なフィードバックの方法など、それまでのm-HANDSで学んだことを実践したことを示す内容であった。各自の発表後は活発な質疑応答が行われ、各自が真摯に事例に向き合っていたことが伝わるものであった。(池田晃太郎)

中国ブロックでは2025年度もブロック主催の指導医講習会 m-HANDS を開催する予定にしております。

ブロック内で教育に関わっておられる学会員の方はぜひご参加ください。

詳細はブロック会員のメーリングリストでお知らせをいたします

日本プライマリ・ケア連合学会 山口県支部からの報告

【山口PTLS (Primary care Trauma Life Support) 活動報告】

令和7年6月7日(土)に山口県熊毛郡平生町の医療法人光輝会 平生クリニックセンターにおいて、PTLSコースを開催いたしました。

今年度も全国から経験豊富な講師陣をお迎えし、診療看護師、初期研修医、そして普段は外傷診療に携わる機会が少ない医師の皆様を対象に、実践的で質の高い外傷初期診療を学ぶ機会を提供することができました。

参加者数は12名で、講義および実技(スキルステーションとオスキー)を通じて、受講生からは非常に好評をいただきました。皆様のご尽力とご協力に深く感謝いたします。

特に、昨年受講された方が今年度はインストラクターとして参加し、自身より経験が豊富な医師に対して教育指導を行っている姿が印象的でした。また、講義の際には、救急救命士によるプレホスピタルの外傷患者への対応等のデモンストレーションもあり、地域の救命士との顔の見える関係の構築にも役立ったと考えています。

また、受講生からの具体的な質問として、「重症外傷の場合、2か所で血管確保をした際の血圧測定方法について」、診療所の看護師とともに医師が現場で実施する際に迷われた現実的な質問が挙げられました。ガイドラインレベルでの明確な記載はないものの、コースディレクターと協議の結果、「血圧測定は上腕にて行い、測定時のみ点滴を一時的に停止する」という方法で問題ないとの見解を共有いたしました。

今後も引き続き、山口県内の外傷、初期診療にあたるプライマリーケアの質向上に貢献できるよう、PTLSの開催を継続していく所存です。

医療法人光輝会 重富雄哉